

# 聞き合いがうまれる効果的なグループ

盛 一 純 平  
堀 井 洋 一  
中 田 泉  
山 下 亜寿佳

## 1 聞き合いとテーマとのかかわり

本研究での聞き合いでは、新たな知識や技能、見方や考え方にふれることにより、今までの自分になかったことに気付き、自分の考えが新たになり、知識が新しくなる。そのためにはより多くの人との聞き合いをすることが理想である。しかし、限られた時間の中で多く的人数で聞き合いをするには、聞くばかりで伝える側にまわれなかったり、多くのかかわりを求めるあまり質より量を求めて聞き合い自体深まらなかったり、困難なことも多い。そうなれば一人一人に聞き合いの効果が満足に得られないことになる。また、聞き合いの内容が限られるので、自分の本当に聞き合いたいことでない場合もある（聞き合いに必要感がない）。

これらの課題を解決し、一人一人に効果がある聞き合いになるために、小集団グループでの聞き合いをテーマとして考えてみることにした。授業の中には聞き合いの場はDステージ、Tステージ、Uステージの各ステージで何度となくある。その中で小集団グループの聞き合いにより効果的な場は、互いの考えの共通点や相違点を見だし、自分の考えをふかめるTステージと考えた。なぜならより多面的な見方や考え方が必要であると考えからである。学習内容にあった課題でTステージを中心に小集団グループでの聞き合いの場をつくってみた。

## 2 聞き合いのための手だて

小集団グループでの聞き合いが、単なる聞き合いの場の分散化に陥らないようにしたい。そのためには、小集団グループの編成が大変重要な手立てになると考える。各教科、学習内容に応じて、以下の五つの観点から小集団グループを編成して聞き合いに取り組んだ。

### グループ編成

#### A 無作為編成グループ

教師が適当に指定したりくじやじゃんけんなどで決めたりと偶然性の高い編成。または生活班などおおよそ学習課題とは関係のない編成。

#### B 課題別編成グループ

学習課題そのものが同じである子ども同士で編成。

#### C 同質、異質編成グループ

学習課題に対する考えが同じ子ども同士で編成（同質）、または考えが違う子ども同士で編成。

#### D 習熟度編成グループ

学習課題に対する習熟度をもとに編成。同じ程度の習熟度の子ども同士、または習熟度が違う子ども同士の編成。

#### E 人間関係編成グループ

性別、仲良しなど日頃の人間関係をもとに編成。

小集団グループ編成の人数は四～五人程度が望ましいと考えるが、学習内容に応じて編成する。また編成方法についても、学習内容によっては、何度かグループを編成し直して聞き合いをすることでより効果が上がるものもある、と考えるため柔軟に考える。

### 3 実践例

各教科等の学習内容にあわせてA～Eの小集団グループ編成を行い実践した。

#### (1) 徳科での実践 「よりよい判断」

##### 活動内でのグループ編成 C同質編成 → C異質編成 → A無作為編成

自作資料「ドッジボール大会 2-(2), 4-(1)」をつかって、主人公のジレンマを道徳的判断により解決する授業である。主人公は約束をとるべきか、思いやりをとるべきか自分の立場を決めて聞き合いをはじめることにした。だれがどの立場であるのか、赤白帽子をかぶり視覚的にわかりやすくした。また聞き合いに入る前に、自分の考えを書く時間を与え、考えをもってからグループ編成を行った。

まずは同じ立場（同質編成）で聞き合いをした。子どもは帽子の色をみて、数人でグループを編成した。同じ考え同士であるため共感を得やすいからか、意欲的に話していた。自分の考えは声に出すことにより、明確になった。また、友達の共感を得て自分の考えに自信をもてた。しかし、聞き合いは長く続かず、同じことを繰り返しているグループもあった。また、自分の考えに他の考えを取り入れようとする様子もあまり感じなかった。この活動は、自分の考えを伝えたい、広めたいという意識が高かったため、聞き合いの姿はあまりみられなかったのであろう。続いて帽子の色の違うもの同士、つまり立場の違うもの同士（異質編成）が集まってお互いの考えの聞き合いにはいった。グループ編成のときから、はやく伝えたい、聞いてみたいという気持ちの高ぶりが感じられた。なんとか自分の思いを伝えようと一生懸命だった。相手の思いや考えを受けとめ、自分の考えを話すという深まりのある聞き合いになっているグループもあった。おそらく自分の思いを確かなものとするために、違う立場の人に伝えたい、聞いてみたいという必要感があつたからであろう。自分とは違う考えを聞くことにより、いろいろな考えがあることや、友だちの思いを知ることができていた。この聞き合いで自分の考えが変わった子どももいたことから、聞き合いによって考えを深めていったことがわかる。

この後、全体で両方の立場のよいところと問題点を確認した。そのことを共通理解して、最後は生活班（無作為編成）であつまり、具体的にどうすればよいかお互いの考えを聞き合い、一つの判断を求めた。どちらかの立場にとらわれないように、帽子ははずした。同質、異質グループでの聞き合いで変化してきた自分の考えをもとに聞き合いをすすめていた。なかなか一つの考えにまとめるのは困難そうであったが、何度もやりとりをして、なんとか一番よい方法として結論をだすことができていた（写真1）。一つに絞るといふ目的がはっきりしている聞き合いは大変意欲的であった。

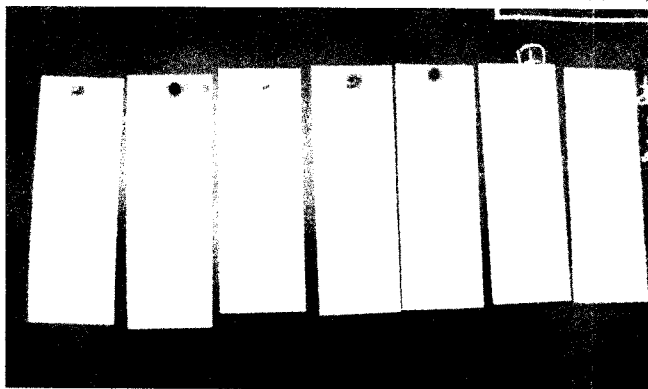


写真1 グループの結論を書いて黒板に掲示した短冊

この実践では三つの場で違ったグループ編成で聞き合いを行った。帽子をかぶり視覚的にとらえたことでグループ作りはスムーズにできた。グループでの聞き合いは、同質編成のような必要感が拡散にある場合は、多人数のほうが効果があるように思う。反対に異質編成のような必要感が、他の考えを聞きたい、または一つに絞り込みたいという収束にある場合は有効であった。このように自分の考えをもとに目的や必要感に応じたグループによる聞き合い活動は、自分の考えを深めるのに効果があつた。

#### (2) 家庭科での実践 「見直そう！毎日の食事」

##### 活動内でのグループ編成 B課題別編成 → C異質編成

調理実習を伴う学習である。ごはんの基本的な作り方を調べた後、よりおいしく作る方法はないか、各自で調べた。各自の情報を出し合い、共有した後その方法が本当においしく作

れるか試してみることにした。試してみたい調理方法は九つだされたので、九つの課題別グループを編成した(課題別編成)。自分の選んだ課題について実験するので、興味関心も高く、



写真2 意欲的に聞き合う課題別グループ

計画や考察における聞き合いは大変意欲的になった(写真2)。計画段階では創造的な意見が多く、聞き合いを重ねてグループの考えが深まっていった。

その後、この実験結果を生かして「おいしいごはんのみそしるを工夫してつくろう」という課題に取り組んだ。課題別の九つの班を分散して違った班同士の四人グループを編成した(異質グループ)。それぞれの調理結果を紹介し合い、その情報をもとに聞き合い、新しい方法を考え出し、実際に調理実習に取り組んだ。課題別グループでは、活動に対する興味関心も高い。他の考えを

取り入れてさらによくしようと聞き合うことに必要感を持っており、意欲が持続していた。異質編成もそれぞれが聞き合ってきたことを伝えたい、聞きたいという思いから、必然と聞き合いが生まれ効果があった。

### (3) 体育科での実践 「表現運動」

#### 活動内でのグループ編成 D 習熟度編成



写真3 男子が女子を補助する



写真4 手本を示し 支える手の位置を確認



写真5 クラス全体で教え合う姿

組体操の二人技では同性がペアになり、練習に取り組んだ。練習が進むにつれ、男子の全ペアで技ができるようになったが、女子のほとんどのペアで技の成功率がなかなか上がらなかった。そこで、技ができるようになった男子ペアと、技がまだできない女子ペアでグループを編成し(習熟度編成)、アドバイスをしたり補助をしたりして練習した(写真3)。

一斉に練習する場合、技のポイントをつかみにくく自分たちのペアに欠けているポイントをつかめないまま、練習をしていることが多い。しかし、できるようになったペアが、できないペアを教えることで、的確なポイントをつかむことができる。また、一つのペアを教えているので、そのペアの補助が入りやすい。

男子ペアと女子ペアがポイントを伝えたり、補助をしたりして練習をしていたが、技の成功率がなかなか上がらず、技のポイントを手本で示し、自分たちに欠けているポイントを見てつかむようにしていた(写真4)。

手本で示してもらったことを生かし、補助をしてもらいながら練習を繰り返していた。練習を繰り返していく中で、自分たちが教えているペアがどんどん上達し、ともに喜び合う心の交流もできてきた。また、自分たちが教えたペアができるようになると、他のペアもできるようになってほしいという気持ちが生まれた。そして教え合う連鎖が次々おき、クラス全体で教え合う姿(写真5)が見られ、クラス全体で二人技ができるようになりたいという思いにつながった。

習熟度別編成では、技ができるようになりたい気持ちとできるようになってほしい気持ちから、技のポイントを聞いたりアドバイスをしたりという形の聞き合いがグループで次々に生まれた。そして聞き合いにより心のつながりができ、その連鎖がクラス全体に広

がっていった。

#### (4) 英語での実践 「When's your birthday ?」

##### 活動内のグループ編成 E人間関係編成

自分の誕生日の行事を紹介する活動では、“We have ….” “We eat ….” “We play ….” などの文を使って、自分の誕生日からイメージするものや行事を紹介し合った。この活動では、男女ペアを編成した(写真6)。同姓によるペアの場合は、日ごろからの人間関係で相手の誕生日を知っていることが多いと考えられる。そのため、相手の話に興味を持つことが難しくなるということが危惧された。そこで、できるだけ互いのことを知らない状況を作るためにペアの相手を異性としたのである(人間関係編成)。子どもは相手のことを十分に知らないという状況のもと、相手の誕生日について知りたいという関心の高さから意欲的に活動に取り組んだ。相手が自分のことをよく知らないことから、丁寧に相手に伝えようとする姿が見られた。

聞く側の子どもも、よく聞き取れない場合には相手に聞き返すことができていた。話し手が述べたことに対して「いっしょや。」 “Me, too.” などの反応も見られ、お互いの理解は深まっていった。

英語の活動であり内容的には多くのことを聞き合うことはできなかったが、相手の知らないことを聞いてみたいという思いが、この聞き合いを意欲的なものにしていった。また英語で聞き合いができた喜びから英語を楽しむことにつながった。

このように、人間関係を考慮したグループ編成をしたため、聞く必要感が高まり、積極的な聞き合いになった。



写真6 男女ペアでの活動

## 4 成果と課題

小集団グループでの聞き合いは、一人一人がこの活動に加わり意欲的に取り組むことができていた。この実践では、A～Eの5つのグループ編成で行った。どの場合も意欲的に聞き合う姿がみられ、小集団グループにした効果がみられた。小集団グループは、学習内容によってどのようなグループ編成をするかが大切な手だてである。教師は、効果的なグループ編成ができるように、さまざまなパターンの編成方法を準備しておくことよいだろう。適切なグループ編成により、一人一人の必要感に応じた聞き合いになり、いっそう深い聞き合いになった。

しかし、それぞれグループで聞き合ったことを全体で共通理解する場がなかなかもてず全体に広められなかった。グループで聞き合ったことをいかに効果的に全体に広めるか、その手だても必要である。グループで聞き合ったことを全体に広めることにより、自分の考えがさらなる深まりを得るだろう。

また一部の発言の強い子どもの意見がそのままグループの意見として通っていたり、なかなか意見が出なかったりとグループによって格差があることも事実である。グループの様子を教師が的確に見取る方法も考え、支援する必要がある。

さらに小集団グループの活動は、さまざまなグループ編成を行うので、互いに認めあえる風土(共感的関係)が不可欠である。日ごろから共感的関係構築に努めてよりよい人間関係を築いていなければならない。

以上のように、小集団での聞き合いには課題も多いが、全体での聞き合いでの課題を解決するには効果的であった。学習内容や課題によつての効果的グループ編成で、一人一人が生きる聞き合いになる。